

倫理法人会では、会員企業の後継者を対象に「後継者倫理塾」を開催している都道府県があります。約一年という期間の中で、「創業者の精神を引き継ぎ、倫理経営を正しく理解・実践する。健全な企業経営を推進する後継者の育成を図る。倫理法人会活動を通して、人間力を培い、地域発展に寄与する人材を養成する」などを目的として、カリキュラムが構成されています。

その中では、純粹倫理の学習だけでなく、経営者としての人間力を養うために自身の内面を振り返ります。それにより、今まで感じたことのない思いに気づけるのです。

T子さんは、父が営む建設会社へ入社しました。建設業という環境の中で、日々の業務に慣れようと懸命に働いていましたが、機械の名前もなかなか覚えられません。そのため、会社の役に立ってない自分が情けなく、挫折しそうな心境だったのです。

しかし、そのような中で目に映ったのは、誰よりも早く電話を取り、お客様を第一に考えている父の姿でした。その姿に消えかけていた仕事への情熱が再び燃え上がってくるのを感じました。

数年後に、父から後継者倫理塾への参加を勧められ、入塾を決定しました。

月に一度、一泊二日で行なわれる研修に参加し、最初は「いち早く経営者としてのノウハウを身につけて父に認めてもらおう」と意気込んでいました。ところが、研修の中では「自分が生かされていることや両親に感謝しているか？」ということの中



## 両親からの深い愛情で 気づいた使命

心に学んでいきました。内心「親なのだから子供の面倒を見るのは当たり前。なぜ、感謝しなければいけないのか」という思いが先行して、中々理解できませんでした。その研修で自分について話す実習の際に、「しっかり者の姉と気の利く妹の間に育った私の役割は、両親の話を聞ける良い娘でいること。でも、それが本当に自分のなりたいたい姿なのか悩むことがある」と話した途端に、涙で声が詰まりました。

「一人で頑張らなくてもいい。肩の力を抜いてみたら？」と周囲からアドバイスを受けたのですが、素直に受け入れられる心境ではありませんでした。翌月の研修では、父からの手紙を受け取りました。それは、T子さんを温かく包み込んでくれるような内容でした。読み進めていくうちに「父に追いつきたい。認められたい」という頑なな思いにとらわれていたことに気づき、それが和らいでいくような感覚に見舞われたのです。さらに、「父と母の娘に生まれてこれて幸せだ。生かされていることがこんなにも嬉しいことだったのか」と思えるようになったのです。

後継者としての学びを深めていくなかで、両親から深い愛情を受けていたと体感することができたT子さん。それを自社の社員やその家族へと向け、会社の繁栄を使命としています。

生かされている感謝の気持ちを絶えず持ち続け、それを周囲に及ぼしていくことが繁栄のきっかけとなっていくのです。